

酒田市立資料館第231回企画展

ありがとう45年 未来へとつなぐ酒田の宝物

館蔵品展 その2－歴史資料－

令和5年6月8日(木)～8月1日(火)

酒田大火(昭和51年10月29日)の復興記念事業として、地元の歴史や文化を伝える資料を後世に伝えていくことを目的に、昭和53年(1978)5月18日に開館した酒田市立資料館。市民の皆様をはじめ、県内外を問わずたくさんの方に親しまれ、利用されてきましたが、今年9月30日をもって45年の歴史に幕を下ろすこととなりました。

今後は、酒田市立光丘文庫とともに、歴史的公文書も合わせ郷土の資料を収集、保管、展示していく施設として、令和6年度に酒田市総合文化センターの市立図書館跡に新たに開館する計画となっています。

当館が収蔵する資料の点数は、この45年間で寄贈、寄託、購入によって約13,000件、60,000点余りになりました。当地域の歴史・民俗・産業・文化を紐解くために、次世代にも残していかなければならない貴重な宝物です。

本展では、当館での最後の企画展として、「その1－文化・娯楽資料－」「その2－歴史資料－」「その3－人物資料－」の3回に分けて、館蔵品の中から展示する機会の少なかった資料を中心に紹介します。第二弾となる今回は、亀ヶ崎城時代の酒田の古絵図をはじめ、電灯の点灯、電話の開通、鉄道敷設などが進んだ、明治以降の酒田の近代化のあゆみを伝える資料や古写真、町並みの変化が分かる明治～昭和の中心市街図などを展示します。



開館直前の酒田市立資料館



土門拳 揮毫「酒田市立資料館」

現在も使用されている「酒田市立資料館」の題字は、酒田出身の写真家・土門拳によるものです。昭和53年当時、土門拳は2度の脳出血のため右手がきかず、車いすの生活を送っていましたが、相馬大作市長(当時)より直々に依頼を受け、不自由な体をおして左手で書きました。



開館初日の資料館の様子

昭和53年(1978)5月18日

第1回企画展「酒田のあゆみ」は8月27日まで開催されました。縄文時代の石器や土器などの考古資料から、江戸時代の絵図、古文書などの歴史資料、鶴渡川原人形などの民俗資料まで、さまざまな分野の資料を展示して、酒田の歴史をたどりました。

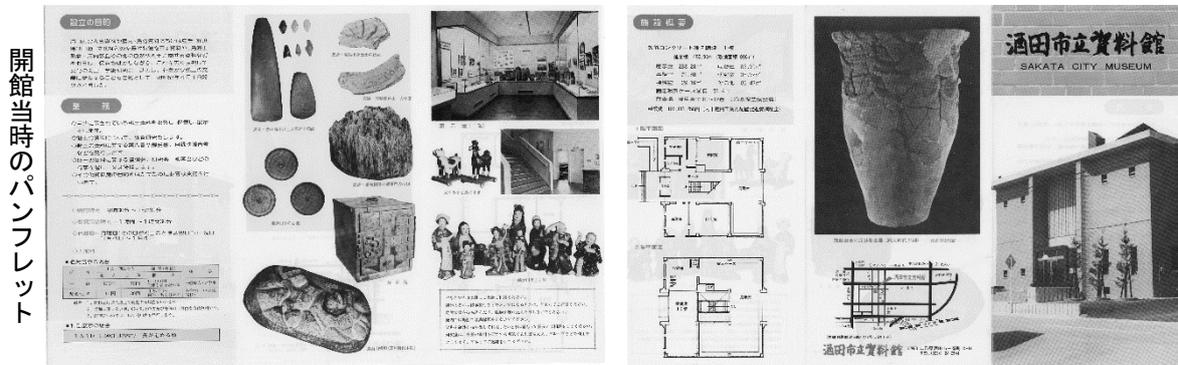


資料館開館のテープカット

昭和53年(1978)5月18日

左から、佐藤三郎資料館協議会長、斉藤辰夫市議会議長、相馬大作市長、阿部久米吉酒田市教育委員会委員長代理、入館第1号の市民、画家・戸田みつき。

戸田みつきがハサミではなくテープを持っているのは、開館に合わせて来館してくれたので、急ぎょテープカットに加わってもらったためです。※役職は当時のものです。



資料館開館時に「酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館」から譲り受けた資料

酒田市立資料館ができるまで、酒田市には歴史的な資料を総合的に収集、保管する施設がありませんでしたが、現在の「酒田市立光丘文庫」の前身にあたる「酒田市立光丘図書館」では、古文書などの文献資料以外に、民具や武器、考古資料などを収蔵していました。

資料館では開館にあたって、光丘図書館から文献以外の資料約1,900点を譲り受けています。現在、2階の常設展示室に展示している黒森遺跡や城輪柵跡の出土品、亀ヶ崎城関係の資料をはじめ、酒田の歴史や文化を伝える貴重な財産として、今日まで保管してきました。



昭和58年(1983)撮影



すがけこんいとおどしもがみどうまる
素懸紺糸威最上胴丸／江戸期

松山藩三代藩主・酒井忠休^{ただよし}が着用した「紺糸威最上胴丸」に似ており、何代かは不明ですが、松山藩主のものと考えられている甲冑です。

兜の前立（※1）には庄内藩主酒井氏の合印^{あいじるし}（※2）を表した「抱き角」があり、兜の鉢は錆地二十八間筋兜で、鐙^{しころ}（※3）は紺糸威黒塗板が三枚で、吹き返し（※4）に花菱紋を打っています。胴丸は最上胴丸といい、胴は鉄の帯状の板札を素懸^{おど}に威し、両脇の四か所に蝶番^{ちょうつがい}があります。甲冑を入れる革張りの箱には、庄内松山藩の「隅入平角片喰紋^{かたぼみ}」が描かれています。

- ※1 前立…兜の前方につける装飾。
- ※2 合印…戦場で敵味方を区別するための標識。
- ※3 鐙…兜の鉢の左右から後方に垂れて首を覆うもの。
- ※4 吹き返し…兜の鐙の両端を左右にひねり返した部分。

六十二間小星兜／年代不明



ありすがわのみやたるひと
有栖川宮熾仁親王の御用弁当箱／年代不明

有栖川宮熾仁親王は、戊辰戦争では東征大総督として出征した人物です。この陶製の弁当箱は、日清戦争の時に参謀総長として下った広島大本營で使用したものの、どのような経路で光丘図書館が所蔵するに至ったかは不明です。



ほんましゆんか
本間彝華「桜蒔絵盆」／年代不明

本間彝華は明治27年(1894)に酒田に生まれた漆芸家。琢成尋常高等小学校卒業後、鶴岡の田村青畝の元で蒔絵の修業をしました。21歳で上京し、漆芸家の辻村松華に師事し、技術を磨きました。

戦後は国宝修理にも携わり、皇太子の結婚、皇孫誕生の際は宝剣の箱に蒔絵を施しています。展覧会などでは何度も入選し、日展審査員も務めました。平成3年(1991)没。

玩具 犬と馬／昭和初期

車輪のついた台に木製の馬や犬をのせて引いて遊ぶ、男児向けの玩具です。



酒田市立^{こうきゅう}光丘文庫の歴史

大正12年(1923)、本間家三代当主・光丘の功績を顕彰する頌徳会が、本間家八代・光弥より先祖伝来の蔵書2万冊などの寄贈を受けて財団法人^{ひかりがおか}光丘文庫^{ひかりがおか}を設立し、同14年に「光丘文庫」が開館しました。

光丘は、宝暦8年(1758)から40年近くにわたって、修学のために文庫を兼ねた寺院の建立を江戸幕府に願い出ていましたが、新寺停止の政策により、実現することはできませんでした。その遺志を継いだのが光弥です。

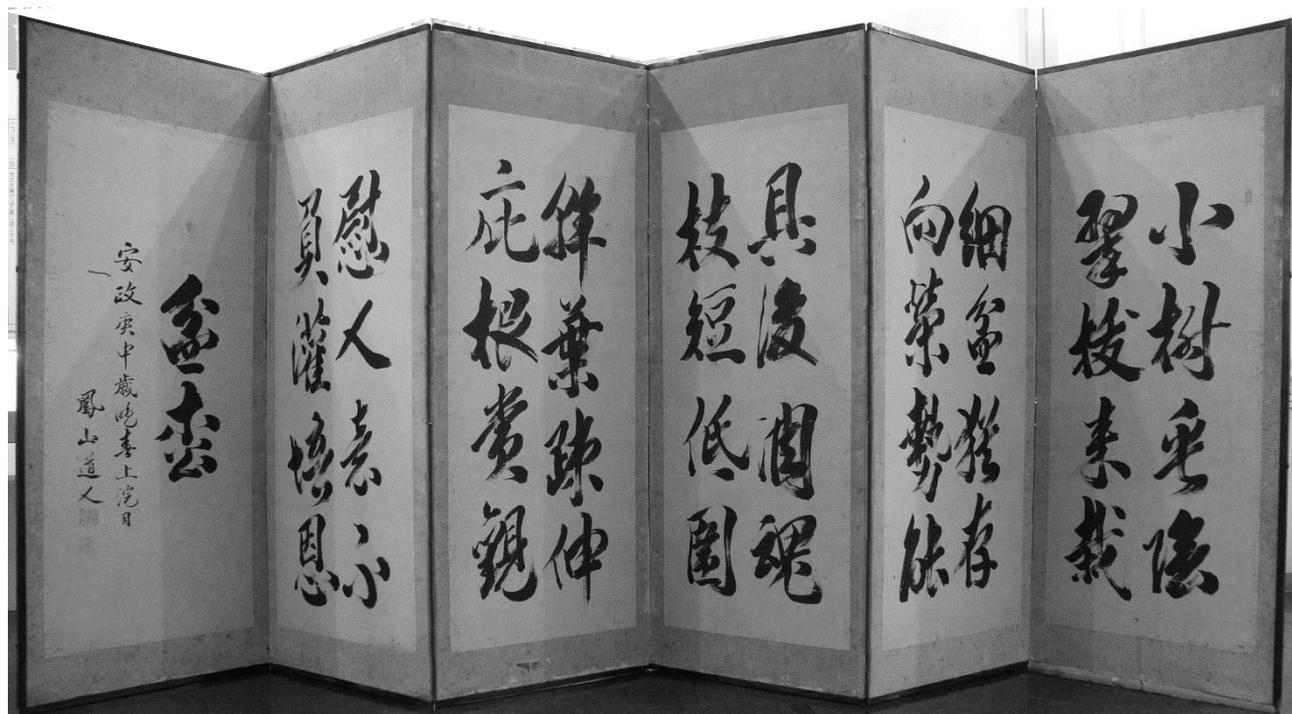
昭和25年(1950)の図書館法施行に伴い、酒田市は光丘文庫の建物の一部と蔵書の一部を借りて「酒田市立図書館」を開設。同33年、財団は建物と蔵書などを市に寄付し、その事業を市に引き継いで解散しました。この時、酒田市立図書館の名称を「酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館」と改称しました。

昭和57年(1982)、酒田市総合文化センター内に酒田市立中央図書館が開設されたことに伴い、光丘図書館を古典籍や郷土資料を専門とする図書館分館とし、「酒田市立^{こうきゅう}光丘文庫」に改称しました。

建物等は平成8年に酒田市指定文化財になりましたが、老朽化に伴い同29年度に酒田市役所中町庁舎に移転しました。

令和6年度には、資料館とともに郷土資料を保管・収集・展示する新たな施設としてスタートする予定です。

亀ヶ崎城があった江戸時代の資料



伊藤鳳山 詩書屏風(紙本墨書) / 安政7年(1860)

伊藤鳳山(儒学者) / 文化3年(1806)~明治3年(1870)

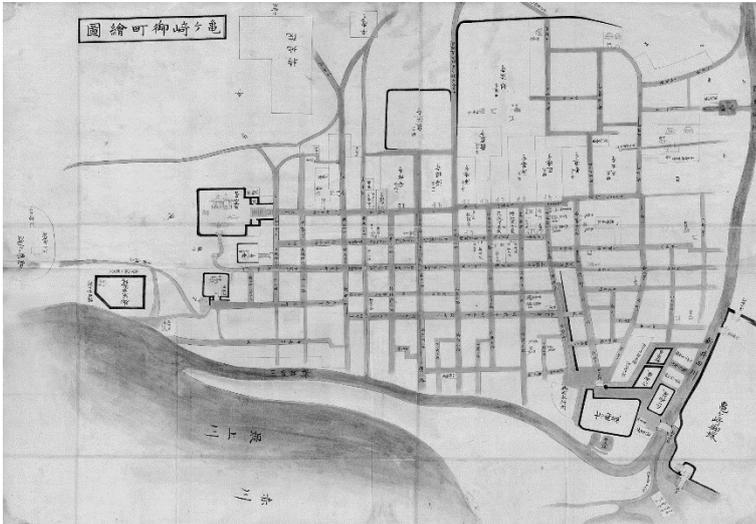
酒田本町の医師・伊藤維恭の二男として生まれた鳳山は、幼少のころに父母と兄を失い、父の友人で大工町の医師・須貝玄益に引き取られました。

文政3年(1820)に江戸に上り、儒学者^{あさがわぜんあん}朝川善庵に入塾。塾長を務め、善庵に代わって大名屋敷で講義を行うまでになります。数え28歳で善庵の養子に入りましたが、間もなく離縁されました。この時期に田原藩(現愛知県)第11代藩主三宅康直の信頼を得たことから、天保7年(1836)に田原藩に招かれ、侍講(※)の任に当たりました。同藩家老で画家としても知られる^{わたなべかざん}渡辺華山、同藩医の^{すずきしゅんざん}鈴木春山とともに「田原三山」と称されました。

鳳山は田原藩に身を寄せて以降、何度か藩を離れて江戸や名古屋などに居を移しています。安政5年(1858)

には酒田へ帰り塾を開きましたが、万延元年(1860)9月に酒田を離れ、奥州各地を巡りながら江戸に戻りました。この書には「安政庚申歳晩春上浣日」と記されており、酒田を出る半年ほど前の安政7年3月頃に書いたものと推測されます。

※侍講…藩主に仕えて学問の講義をする役割



亀ヶ崎御町絵図／江戸後期

現在の酒田東高校の場所にあった亀ヶ崎城から酒田の町を描いた絵図です。持地院が寛政9年(1787)に移転した現在地であり、林昌寺が文政6年(1822)に移転する以前の場所に書かれていることから、寛政9年から文政6年の間に作られた絵図と推測できます。

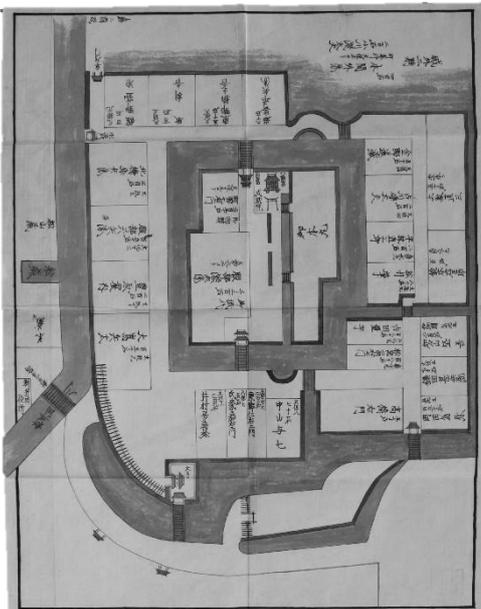
酒田の町は、もとは最上川南岸の「向う酒田」(宮野浦地区)にありました。しかし、度重なる最上川の洪水や流路の変化により、向う酒田を船着場として使うことが難しくなり、

永正年間(1504～21)から慶長年間(1596～1615)にかけて最上川北岸の「当酒田」に移転し、河口の砂丘に町をつくったといわれています。

亀ヶ崎城はかつて東禅寺城と呼ばれていました。もともとは酒田東部の四ツ興野しらひげみずにありましたが、文正元年(1466)に「白髭水洪水」と呼ばれる最上川の大洪水によって崩壊し、文明10年(1478)に東高の所に移ったとされています。

慶長6年(1601)、最上氏の東禅寺城攻めにより酒田の町はほとんどが焼失してしまいました。その後、庄内攻略の戦功から東禅寺城主となった最上氏家臣・志村光安しむらあきやすが新たな町割りを行いました。この時整備された東西の数条の大通りや、南北に通る数多くの小路は、現在もほぼ同じ位置に残っています。

城の名前が亀ヶ崎城に変わったのは慶長8年(1603)。この年の3月、酒田湊に7尺(約2メートル)近くある大海亀があがり、その報告を受けて吉事として大喜びした最上義光が、名前を改めさせたといわれています。



亀ヶ崎御城内之図／嘉永2年(1849)

元和8年(1622)に最上氏が改易になった後、庄内に入部した酒井忠勝は鶴ヶ岡城を居城とし、亀ヶ崎城を支城としました。亀ヶ崎城には城代(※1)が置かれ、忠勝の叔父・松平甚三郎が初代城代となりました。

この地図は幕末頃の亀ヶ崎城内の様子と、居住していた家臣を記録しています。城は400メートル四方ほどの大きさで、堀が巡らされていました。中央の「御本丸」には御殿や兵具・塩硝蔵がありましたが、ここには記載されていません。本丸の西側の二の丸に城代と物頭ものがしら(※2)の屋敷があり、本丸と二の丸の周囲に巡らされた三の丸に中級武士の屋敷が24軒あったことがわかります。

地図の左上には「城外二騎」として、城郭の外に居住している本間家5代目本間外衛とのえ(光暉)と酒田町奉行の小川渡太夫の名前を記しています。

明治維新後、亀ヶ崎城は明治3年(1870)に建物の一部を残して取り壊されました。

※1 城代…家老・中老の中から選ばれ、藩主の代理として城を統括しました。

※2 物頭…足軽の指揮官にあたる役職です。



左：亀崎御城内塩焔御土蔵の棟札／文化元年（1804）
 右：塩焔土蔵大修復の際の棟札／弘化四年（1847）

本丸敷地内の北側にあった塩焔蔵（火薬庫）の棟札です。

文化元年の棟札には城代をはじめとする役人や棟梁の名前があります。塩焔蔵はいくつかの絵図に簡略化して場所が示されていますが、実際どのような建物だったのかは不明です。弘化4年の修復時の棟札によると、蔵を三尺盛り上げて5寸角・長さ3尺の石を土中に打ち、壁を塗って修復し、屋根を瓦葺きにしたことが分かります。

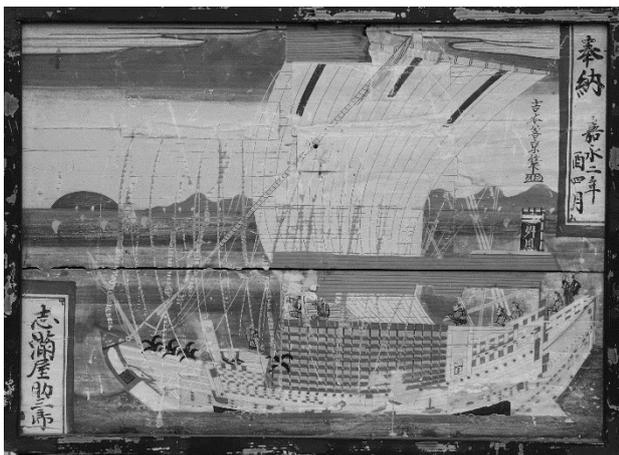
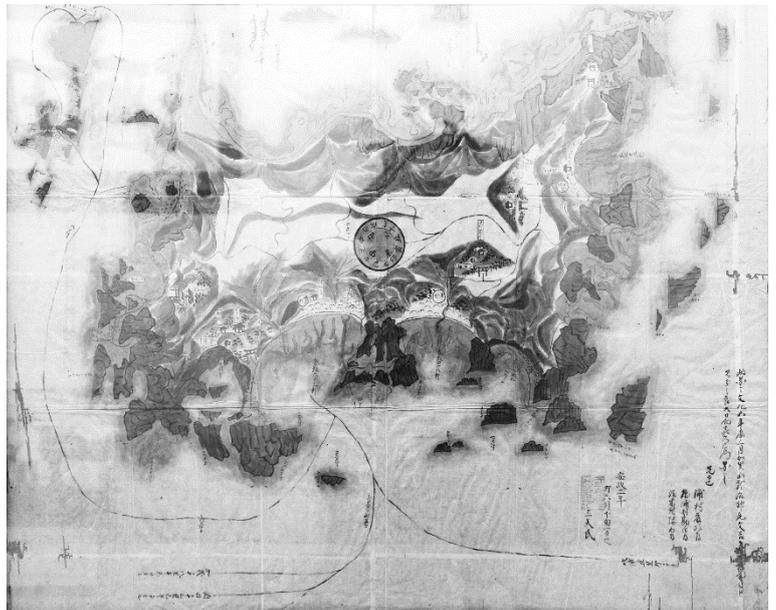
飛島絵図／文化5年（1808）作成、
 安政2年（1855）写し

飛島は酒田港の沖合39キロにある周囲10.2キロの小さな島です。江戸時代には庄内藩から島役人が派遣され、島の行政に当たっていました。飛島は北前船の風待ち港としての役割を果たしたと考えられています。

飲料水の確保と冬の季節風から家屋を守るため、島民は島の東側で生活をしてきました。家を建てる平地も限られていたため、勝浦村、浦村（中村）、法木村の3つの村は戸数を増やさないようにしていました。

この絵図は、文化5年に作成された絵図を安政2年に写したものです。島の地形や主要な建物、各村の戸数の他、酒田・加茂・吹浦までの距離を記しています。

文化5年、庄内藩は飛島に外国船対策のための陣屋を建設しました。地図右側の書入れにある加賀山龍治と神尾文吉という人物は、当時派遣された庄内藩士です。この絵図の原本は陣屋建設に関連して作成されたのではないかと考えられます。



船絵馬「外川丸」／嘉永2年（1849）

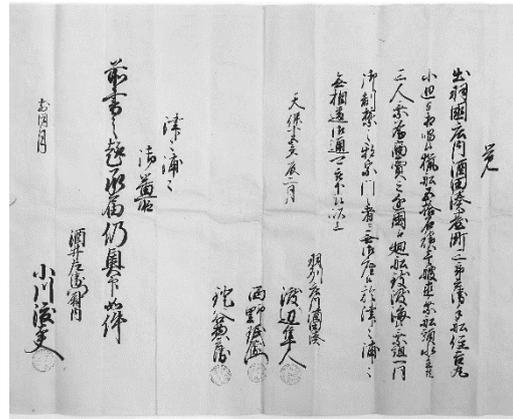
「板子一枚下は地獄」という言葉があるように、常に天候に命を左右された船乗りたちは神仏に祈り、神社仏閣に様々な寄進や奉納を行いました。船絵馬もそのひとつです。

船絵馬は初め幕府の許可を得て外国と交易した豪商のみが奉納していましたが、北前船交易の発展とともに一般化し、天保期（1830～44）から明治30年頃までは最も盛んに奉納されました。

昭和60年（1985）に山形県立博物館が発行した

『山形県の絵馬—所在目録—』によると、酒田の寺社では47点の船絵馬が確認されています。その多くは明治時代に地元の漁師が奉納したものです。江戸時代、繰り返し火事に見舞われたことも理由なのか、港に近い旧市内にはほとんど残っていません。しかし、船絵馬奉納の慣習が酒田に根付いていたことは確かです。少ないながらも他の湊の船乗りが奉納した船絵馬も残っており、北前船寄港地としての酒田の歴史を垣間見ることができます。

展示している船絵馬は、日吉町の稲荷神社に奉納されたもので、奉納した志満屋は酒田の廻船問屋です。大坂の船絵馬師・吉本善京の落款があります。



酒田湊台町・高田三郎兵衛手船「住吉丸」の旗(左)と往来手形(右)／江戸後期

往来手形(船往来手形)とは、江戸時代に諸国を往来する船の船頭が所持することを義務付けられていた証明書です。船主の名前や乗組員の数、キリタンではないこと、通行の目的や地域などが記されています。

展示しているのは、天保15年(1844)、台町(現在の日吉町)の高田三郎兵衛が手船住吉丸で近国を回って商売をした時の手形です。酒田町大庄屋・渡辺隼人、^{おとな}長人(三十六人衆)の西野珉右衛門、酒田町年寄・鏡谷惣兵衛と酒田町奉行・小川渡太夫の捺印があります。

三郎兵衛がどのような人物かは不明ですが、住吉丸は50石(7.5トン)積みの小船で、船頭、^{かこ}水主と3人で商売のために近国を回りたいと書いてあります。



本間光丘が使用した「御貸金方御用筆筭」／江戸期

本間光丘(享保17/1732～享和1/1801)は、酒田の大地主本間家の第三代当主であり、本間家中興の祖といわれています。米取引を中心とした商売のほか、酒田の商人や米沢・松山・新庄など多くの藩を相手に金融業を営みながら土地を集積し、強大な財を築きました。公益家としても名を残しており、光ヶ丘の砂防林植林や、神社仏閣の造営など、数多くの功績を残しています。山王祭が京都の祇園祭に

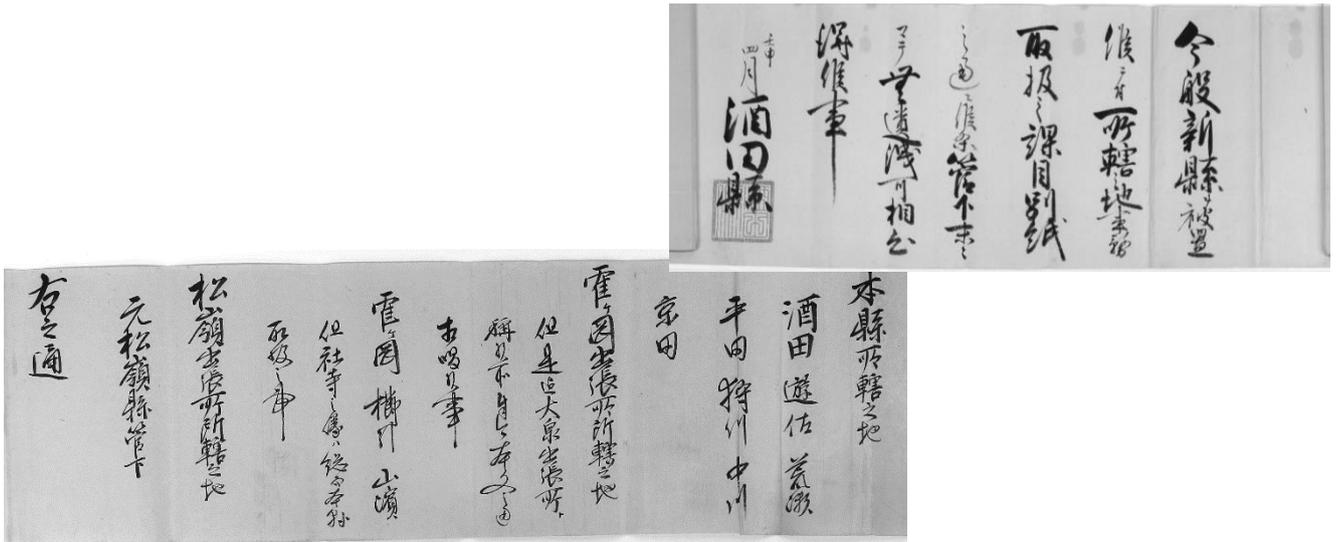
倣った盛大な祭となったのも、光丘の力によるものと考えられています。

光丘は商人として活躍しただけではなく、武士の身分を得て庄内藩に仕えていました。明和4年(1767)、光丘は庄内藩の「御家中勝手取計」に任命され、藩財政の立て直しに取り組みました。その方法は家中(家臣)を苦しめていた多大な借金を肩代わりし、低利の年賦償還で返済させるというものであり、鶴岡の小姓町(現県立鶴岡北校正門付近)に置いた貸金役所(本間役所)で金融事務を行いました。

筆筭はその当時使用されたもの。扉の裏に「明和亥四年」本間久二郎(久四郎)光丘」などの墨書きがされています。



酒田県から山形県へ 明治初期の県政資料など



第二次酒田県の所轄地と事務取扱課目の通達文（部分）／明治5年（1872）

明治維新後、酒田の統治機構は明治元年（1868）に酒田民政局、翌年に第一次酒田県、さらに翌年に山形県酒田出張所へと移行しました。

明治4年1月に発足した第二次酒田県では、数年に渡って続いていた「天狗騒動（※）」を武力で抑えるために旧庄内藩士を県政に起用し、参事は松平親懐^{まつだいらちかひろ}、権大参事は菅実秀^{すがさねひで}が務めました。騒動の鎮圧に総力を傾けた酒田県では当初、その前身である山形県酒田出張所・大泉県・松嶺県の行政機構を運用していました。明治5年1月に騒動を鎮めた後、第二次酒田県としての行政機構の整備に着手しています。展示資料は、明治5年4月に酒田県が「本県所轄之地」と「事務取扱課目」を通達した文書です。旧山形県酒田出張所に酒田県庁を、鶴ヶ岡と松嶺に出張所を置き、それぞれの所轄地を定めています。また、庶務課をはじめとする4つの課を置き、管内の事務に当たるよう定めています。

※天狗騒動…戊辰戦争後に生活が困窮した酒田県下の農民たちは、雑税の免除などの嘆願を酒田県に提出しましたが、県はこれを認めませんでした。このことから、「天狗党」を名乗る人々が大庄屋宅の襲撃や米屋の打ちこわしをするなどした「天狗騒動」が起きました。



酒田県が発行したお金「酒田県札」／明治2年（1869）発行

明治初年の日本の通貨は、維新政府が財政を補うために発行した「太政官札」、江戸時代から各藩が発行していた「藩札」、各府県が発行した「府県札」、さらに幕末の開港とともに流入した洋銀など、多種多様な貨幣が流通する事態となり、大混乱というべき状況にありました。

政府は混乱を正し、近代国家に相応しい貨幣制度の確立のため、貨幣の統一を進めました。明治4年（1871）5月に「新貨条例」が制定され、日本の貨幣制度は「円」を単位とする新しい通貨によって統合されることになりました。

酒田県では、八百文、三百文、二百文、百文、五十文、二十五文の酒田県札を発行しました。展示しているのは明治2年（1869）に発行した三百文と百文の県札です。金額を書いた札と、発行年及び正貨（銀）との引替期限を書いた札があり、2枚で一組だったと考えられます。この県札は明治己巳（明治2年）に発行され、引替期限は庚午（明治3年）5月でした。

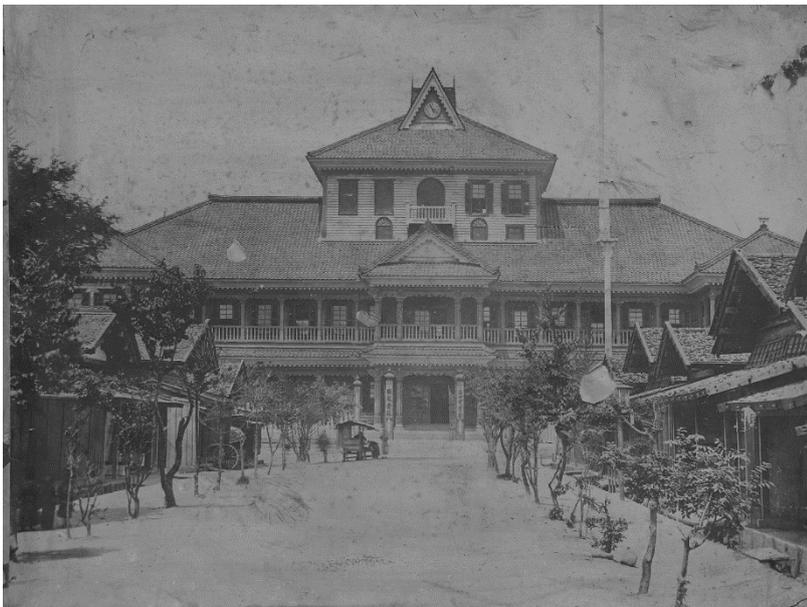
近代化が進んだ明治～昭和初期の資料

酒田の学校教育の始まりと「琢成学校」の歴史

酒田で最初の学校は、明治2年(1869)に天正寺につくられた「学而館」です。戊辰戦争後に酒田の統治に当たった民政局長官・西岡周碩が設立し、詩文や習字を約100名の生徒に教えました。しかし、熱心に活動していた西岡が去ると教育の質が落ち、「学校規則改正につき、当分止められ候事」という酒田県からの通達によって、わずか1年5ヵ月で閉校しました。学而館は短命で終わりましたが、酒田の学校教育の祖となりました。

明治5年(1872)8月、「学制」が發布され、全国各地に小学校、師範学校が設立されることになり、酒田と周辺地域にも学校が続々と設立されました。明治8年(1875)にそれら小規模学校を合併して「鳴鶴学校」が新設され、明治12年(1879)、鳴鶴学校を母体に「琢成学校」が開校します。秋田町に建てられた木造3階建ての琢成学校は、当時の山形県内最大規模の学校で、生徒数は最も多い時で1,300人を超えました。酒田中学も併設し、鶴岡の文学者・高山樗牛もここで学びました。

しかし、わずか4年後の明治16年(1883)に起きた火事で類焼し、再建した校舎も明治20年(1887)に火事で全焼しています。翌21年に「酒田尋常高等小学校」と改称し、泉流寺の畑地(現在の酒田市総合文化センター)に再建されましたが、6年後の庄内地震によって校舎が倒壊します。災難続きの学校だったので。



本町通りの突き当りにあった琢成学校
／明治15年(1882)



家坂徳三郎(徳翠軒) 撮影
酒田尋常高等小学校の校庭で体操をする小学生／明治後期

酒田の写真館の草創期

写真は文明開化を象徴する技術のひとつです。酒田でも明治時代に写真館の営業が始まっています。現在、当時の写真館は残っておらず、明治27年(1894)の庄内地震や度重なる火事などにより、全容を把握すること難しくなっていますが、ガボリオ・マリ氏(元慶應義塾大学教授)の研究によると、現在分かる限りで最初に写真館を開業したのは白崎民治という人です。開業時期は明治13～15年(1880～82)頃でした。

「酒田尋常高等小学校の校庭で体操をする小学生」の写真を撮った家坂徳三郎は、明治18年(1885)に徳翠軒を開業したといわれ、酒田の写真館の草創期に活躍した写真師の一人です。同じ頃に、酒田で洋画の先駆者として活躍した池田亀太郎が池田写真館を開業したといわれています。ほかにも松山堂、長谷川写真館、美影堂、華影軒、玉影館が開業しています。酒田の町並みや酒田港風景などを写した写真は絵はがきにもなっており、昔の酒田の姿を記録した貴重な資料となっています。

資料館ではこうした古い写真や絵はがきのほかに、フィルムが普及する以前に撮影に使われていたガラス乾板も収蔵しています。鑑谷家で使った電話機のとりに展示している電話交換室の写真は、収蔵しているガラス乾板からプリントしたものです。



ガラス乾板



プリント(新井田川の写真)



明治26年(1893)10月3日付「庄内新報」

酒田で最初に発行された新聞は、明治14年(1881)に自由民権運動家・森藤右衛門を社長とした「両羽新報」でした。「庄内新報」は明治23年(1890)に創刊した、一般紙としては2番目に古い新聞です。

酒田市立資料館では昨年度、明治26年(1893)の「庄内新報」をまとめて入手しました。新聞は大量かつ大判であることに加え、古紙として利用されるという性質上、後世に残ることがあまりありません。特に酒田は明治27年(1894)に発生した庄内地震で、数多くの歴史資料を失っていることもあり、庄内地震以前の新聞がまとまった形で見つかったことは、非常に意味のあることです。

この年の紙面には、令和3年に国指定史跡となった山居倉庫の開業、女性写真師・池田まさによる写真館玉影館の開業、前年に亡くなった俳人・夏静の句碑を日和山公園に設置することを報じる記事などがみられます。

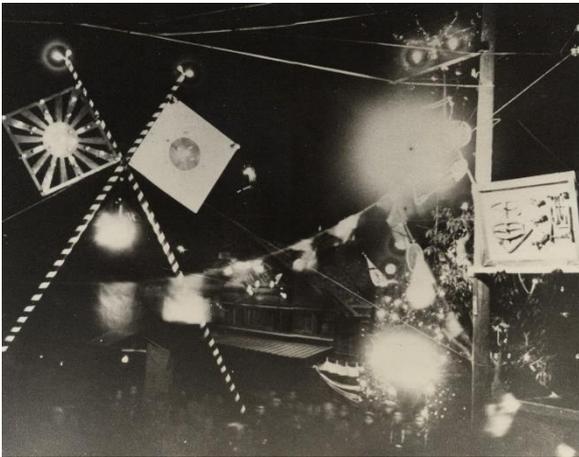
この日の新聞には、米の売買を行う「株式会社酒田米商会所」の役員と仲買人が、9月28日に農商務大臣の認可を得て、米

商会所が「株式会社酒田米穀取引所」として再スタートしたことを伝える広告を出しています。

酒田の電気事業のはじまり

電気(電灯)が日本に初めて登場したのは明治15年(1882)でしたが、酒田で電気事業が始まるまでには、かなりの時間を要しました。

明治後期の酒田では、町外にある発電所から電気を買うか、新たに発電所を設置するか議論が起き、その結果、明治39年(1906)に町営電気事業の創設を議決。日向村升田(旧八幡町)に酒田町営電気第一発電所を建設し、日本に初めて電灯が灯った日から26年後の明治41年(1908)11月4日夜7時30分、ついに酒田に電灯がつけました。



酒田町営電気開業を祝う電気装飾

／明治41年(1908)11月4日

酒田に初めて電気がついた時の写真です。本町四丁目(現在の酒田産業会館の場所)にあった町営電気作業所前には電飾が作られ、電柱に「酒電」と書かれた看板と、大きな電球が取り付けられています。電気の灯りを一目見ようと、電飾の下は見物客でいっぱいです。同年には電話も使えるようになりました。

鏡谷家が酒田で最初に使った電話機／明治29年(1896)

酒田では明治41年(1908)12月から電話交換業務が開始されましたが、酒田米穀取引所の仲買人をしていた鏡谷家では、それより12年も早い明治29年(1896)に、鏡谷家と取引所との間に私設で電話を引いています。それほど離れていない場所にありましたが、わざわざ電話でやりとりをしたほど、「待ったなし」の判断が米の取引に必要とされたのでしょう。



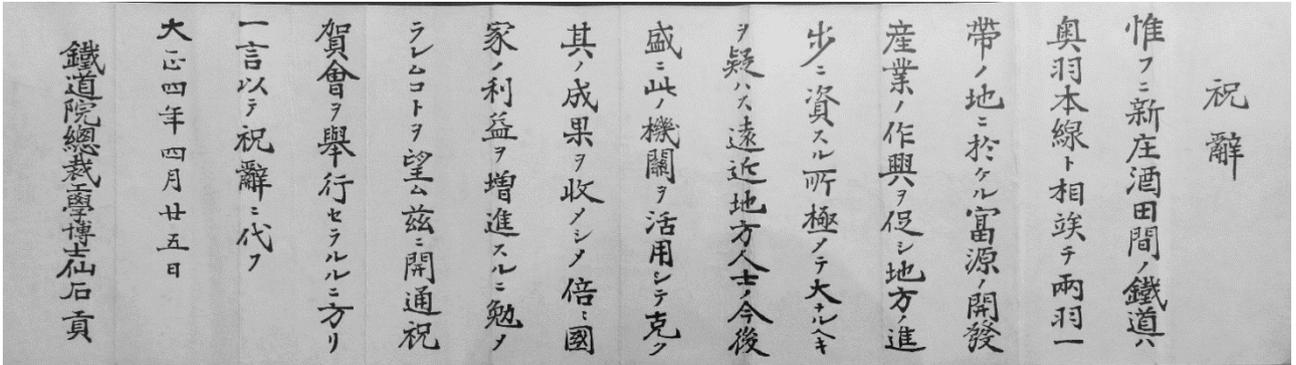
酒田郵便局にあった電話交換室／大正時代

写真には、電話交換手の女性たちが写っています。当時の電話は、受話器を上げると電話交換室の電話交換手につながり、電話をかけたい相手先を伝えてつないでもらいました。

待望だった陸羽横断鉄道酒田線(陸羽西線)の開通

大正3年(1914)12月、酒田駅が開業し、陸羽横断鉄道酒田線(陸羽西線)が開通しました。翌4年4月には酒田駅と酒田港を結ぶ臨港線が敷設され、貨物専用の最上川駅(酒田港駅)が設置されました。4月25日には日和山で開通記念の式典が開かれ、鉄道院総裁の仙石貢が祝辞を述べています。式典には来賓千数百名が参列し、芸妓140人が出演して祝賀芸能大会を行うなど、盛大に執り行われました。

また開通を祝う花火大会が4月24～26日の3日間にわたって開催され、長い間の誘致運動がようやく実を結んだ酒田は祝賀ムードに包まれました。



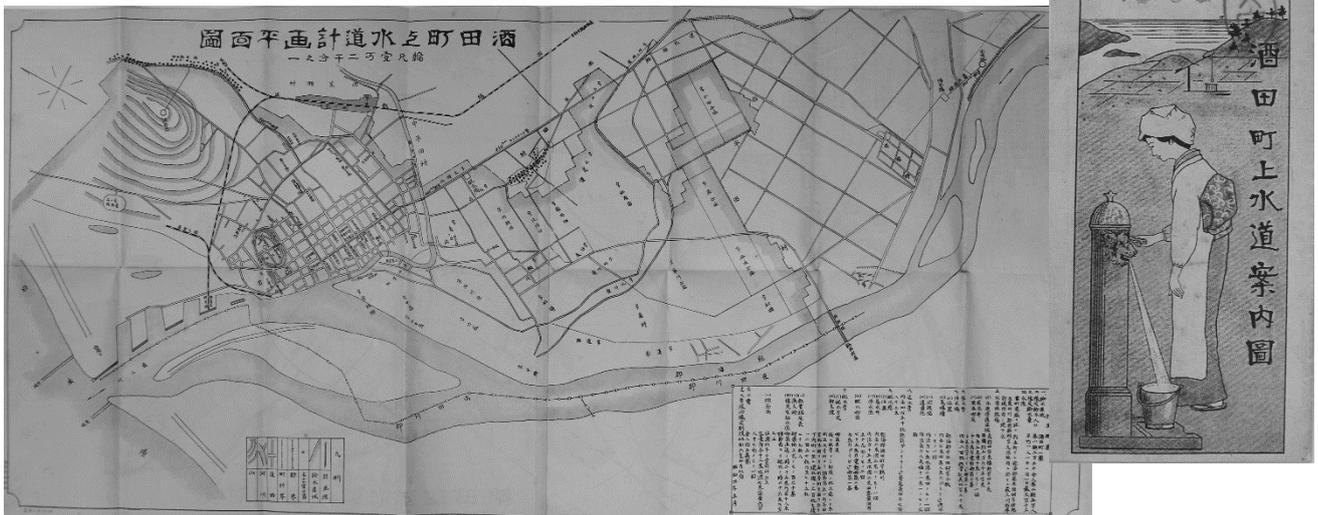
陸羽西線開通式祝辞／大正4年(1915)



祝開通煙火番組／大正4年(1915)



酒田鐵道開通記念の絵はがき／大正4年(1915)



酒田町上水道案内図／昭和4年(1929)

酒田の上水道は昭和5年(1930)に敷設されました。それまで用水はすべて井戸水に頼っていましたが、水質はあまりいいものではなく、水量が不足することもありました。

この案内図は、敷設工事が始まった昭和4年に作成されました。酒田一円を配水区域をとし、この年の4月に酒田町亀ヶ崎として合併した鵜渡川原村も給水区域となっていることがわかります。



酒田町水道竣工記念品の桐火鉢／昭和5年(1930)

酒田町水道竣工の記念品として、酒田の名工として知られる初代齋藤兼吉が制作した桐火鉢です。昭和5年11月11日に行われた竣工式で、参加者全員にこの火鉢を2個ずつ、さらに町長、助役、町会議員、工事関係者などに記念品代として現金が贈られました。

宴会費を含めた竣工式費用は3万円。当時としては大変高額でした。これが新聞に報道されると、不景気のどん底にあった影響もあってか町民の不満が一気に高まり、同月21日にはこの出費を不当なものとして追求する町民大会にまで発展しました。

大会には2,000人に及ぶ町民が集まり、弁士3人が警察に拘束される混乱のなか、後に衆議院議員になった新聞記者・池田正之輔が議長となり、町長と助役の即時辞職などを決議しました。中里町長はこの要求を拒否しましたが、事態の悪化を恐れて新聞で町民に対して陳謝しました。

納得しない町民が再び町民大会を開きましたが、酒田警察署は治安妨害として無届示威運動の名で弁士らを拘束し、問題は次第に収まっていきました。



←火鉢の底には、「酒田水道竣工記念、昭和五年十一月」のハンコが押され、齋藤兼吉のシールが張ってあります

戦時中の資料

日中戦争から太平洋戦争の時代

昭和6年(1931)の満州事変、翌年の満州国建国以降、軍国主義政策を拡大していった日本。同12年(1937)7月に始まった日中戦争では、さらなる大陸進攻を推し進め、昭和16年(1941)12月8日にはイギリス、アメリカに対して宣戦布告し、ハワイの真珠湾を攻撃。太平洋戦争が始まりました。

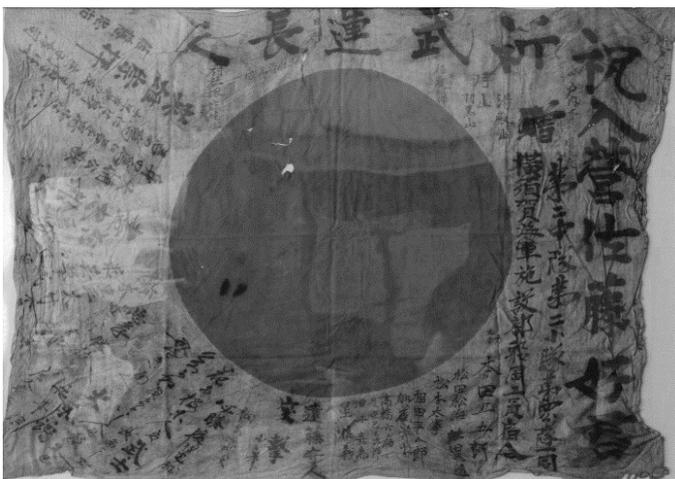
開戦当初は優勢だった戦局は、戦いが長期化する中で劣勢となり、昭和20年(1945)4月には、アメリカ軍が沖縄に上陸。8月には広島、長崎に原子爆弾を投下しました。さらにソ連軍が中立条約を破って参戦し、満州・朝鮮方面で攻撃を開始。ついに日本政府は降伏を決定し、8月15日に終戦を迎えました。

戦争は多くの命を犠牲にし、国民に厳しい負担を強いてきました。酒田からも多くの男性が出征し、戦況の悪化とともに大人だけではなく少年少女たちも、食糧増産のための農作業や、軍需工場などでの労働に明け暮れました。終戦間際には、2度の空襲で第一国民学校(現在の酒田市総合文化センター)や港湾施設などが被害を受け、死傷者も出ています。



盛大に見送られた出征兵士

酒田から出征する兵士は、酒田駅前の八雲神社で「武運長久」を祈ってから、中学生のプラスバンドを先頭にして酒田駅まで行進しました。沿道は「日の丸」の小旗を持った大勢の市民で埋め尽くされました。



旧平田町から出征して戦死した佐藤^{よしみ}好さんに贈られた寄せ書き入りの日章旗

戦時中、戦地に兵士として出征した人は、家族や親類、友人、近所の人たちが寄せ書きをした日章旗を持って戦いました。この日章旗は、旧平田町に生まれ、25歳という若さでフィリピンで戦死した佐藤好さんが持っていたものです。

アメリカ兵は、日本兵の日章旗や写真を戦利品として持ち帰っていたそうです。好さんの日章旗は、アメリカ人のドナルド・ストルニアーさんが、兵士

だった義理の父親の遺品を整理していた時に見つけました。

現在、NPO法人「OBONソサエティ」が、このような戦没日本兵の遺品を日本の遺族に返す活動をしています。好さんの日章旗は令和3年9月、このNPOと日本遺族会、酒田市の平田遺族会、酒田市社会福祉協議会などの協力により、酒田に住んでいた佐藤厚さん(好さんのおい)に届けられ、新聞やテレビなどで報道されました。

令和4年2月に酒田市立資料館が寄贈を受け、大切に保管しています。



戦地の出征兵士に送った「慰問袋」

戦時中、出征した兵士を慰め、元気づけるため、戦地に「慰問袋」が送られていました。中身は慰問状、お守り、薬品、日用品(石けん、ちり紙など)、缶詰、写真など。袋は手ぬぐいなどで手作りしたほか、市販品もありました。

日露戦争の時に、出征軍人家族慰問婦人会、愛国婦人会などが作ったことが始まりといわれています。出征兵士の増加により、学校でも慰問袋作りが行われるようになりました。

写真は、酒田から中国大陸に出征した人が、自分に送られてきた慰問袋の中身を撮影したもの。梅干しなどの缶詰、ドロップ、キャラメル、将棋と囲碁の簡易ゲームのほか、「日の出ウキスキー」と書かれた箱が見えます。

戦時中に市民が強いられた負担

日中戦争が始まると、民需産業の軍需産業への転換、徴兵などによる労働力不足に伴って物資・食糧が不足し始め、昭和14年(1939)から米の配給統制が実施されました。物資統制は、戦況の悪化とともに強化され、あらゆる食料品、日用品、衣料品に及びました。

また昭和16年(1941)の「金属回収令」により金属供出が本格化し、鉄・銅・金・銀・アルミニウムなどの金属を使った家庭用品は、釘1本まで強制的に供出させられました。そのため、人々は金属以外のもので作られた生活用品を代用していました。



衣料切符



紙製の灯火管制カバー

戦時中は、部屋の明かりが外に漏れて攻撃の目標にならないように照明の使用が制限されていました。

この「灯火管制カバー」は、外に明かりが漏れないよう電灯を覆っていたものです。カバーの外側には、使用できる明かりの条件や、「漏るる一燈敵機を招く」という防空標語などが書いてあります。紙製のカバー以外にも黒い布で電灯のまわりを覆ったり、窓に黒いカーテンをひいて外に明かりが漏れないようにして夜間の空襲に備えていました。



紙製の洗面器

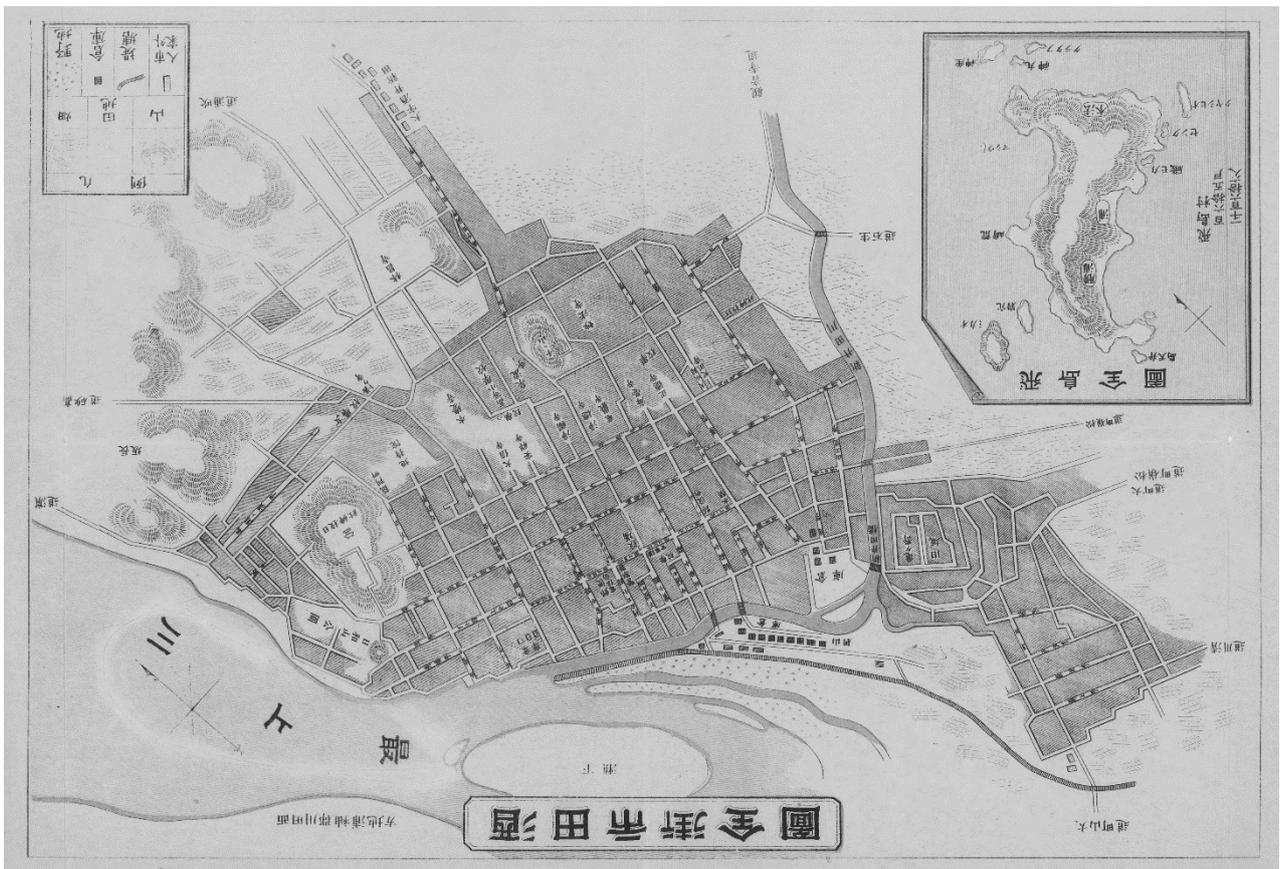
金属の代わりに古紙を利用して作られたものと思われます。洗面器の側面には、微かに文字も見えます。

紙製のちりとり

ふちは鉄製ですが、それ以外は紙で作られています。



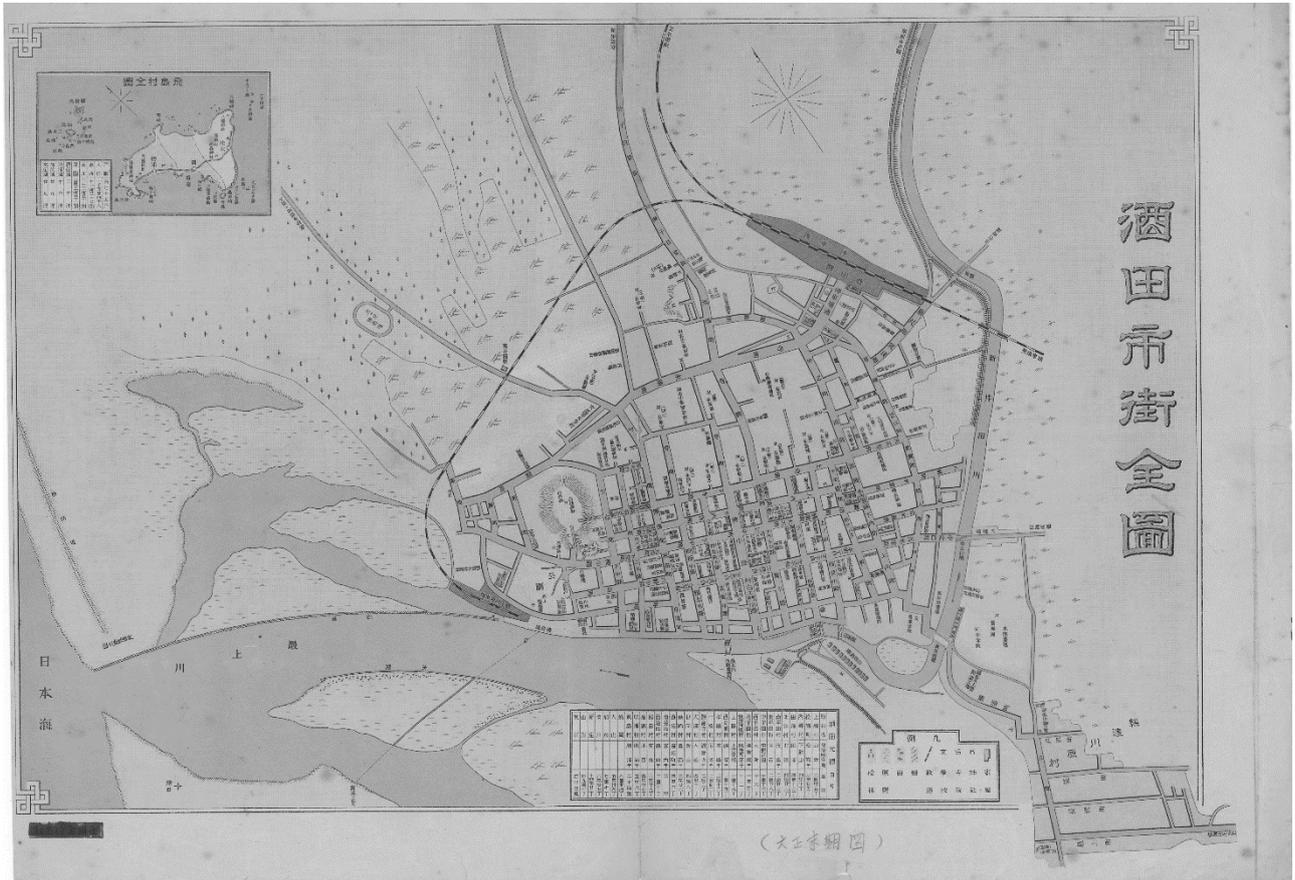
明治～昭和に作られた酒田の市街図



明治36年(1903)の酒田市街全図

亀ヶ崎城跡には堀の形がはっきりと描かれています。明治36年に竣工した最上川改修工事以前の最上川河口の形がわかり、まだ江戸時代の酒田の面影をとどめています。

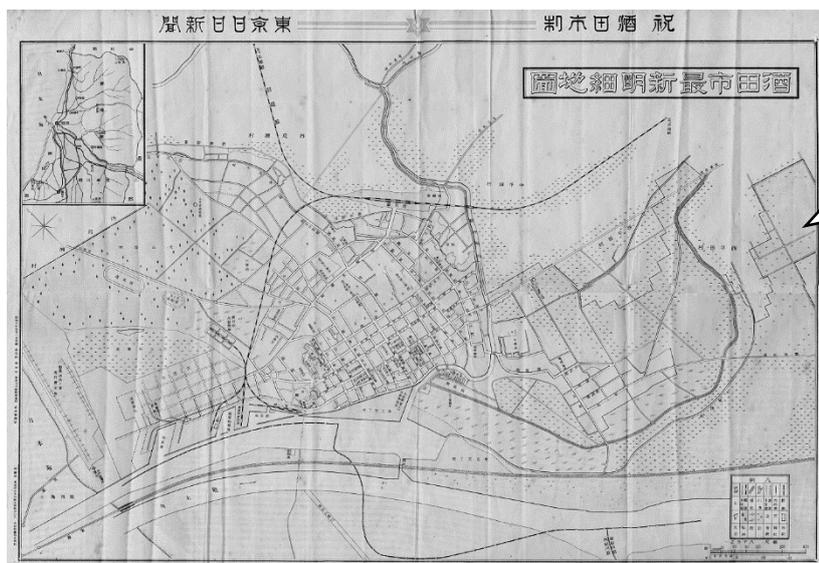
※北を上にするために向きを逆になっています



大正11年(1922)の酒田市街全図(複製)

大正3年(1914)12月に陸羽横断鉄道酒田線(陸羽西線)が、翌年4月には酒田駅と酒田港を結ぶ臨港線が敷設されました。最上川河口の様子も改修工事によって大きく変わっています。

松林が広がる光ヶ丘には、大正8年(1919)に整備された光ヶ丘運動場が見えます。当時の新聞には学校や団体が参加して運動会が行われていたことが報道されています。

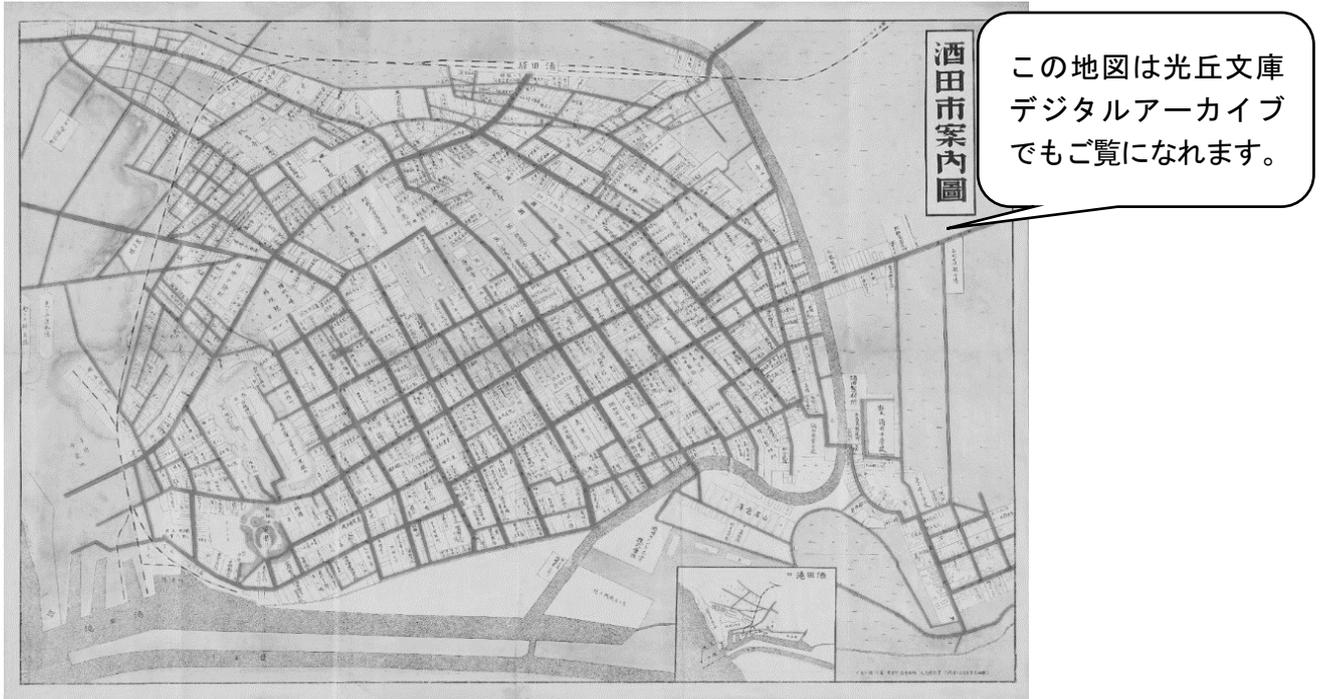


この地図は光丘文庫デジタルアーカイブでもご覧になれます。

酒田市最新明細地図/昭和8年(1933)5月1日発行

酒田市制が施行された記念に発行され、地図上部には「祝 酒田市制」とあります。

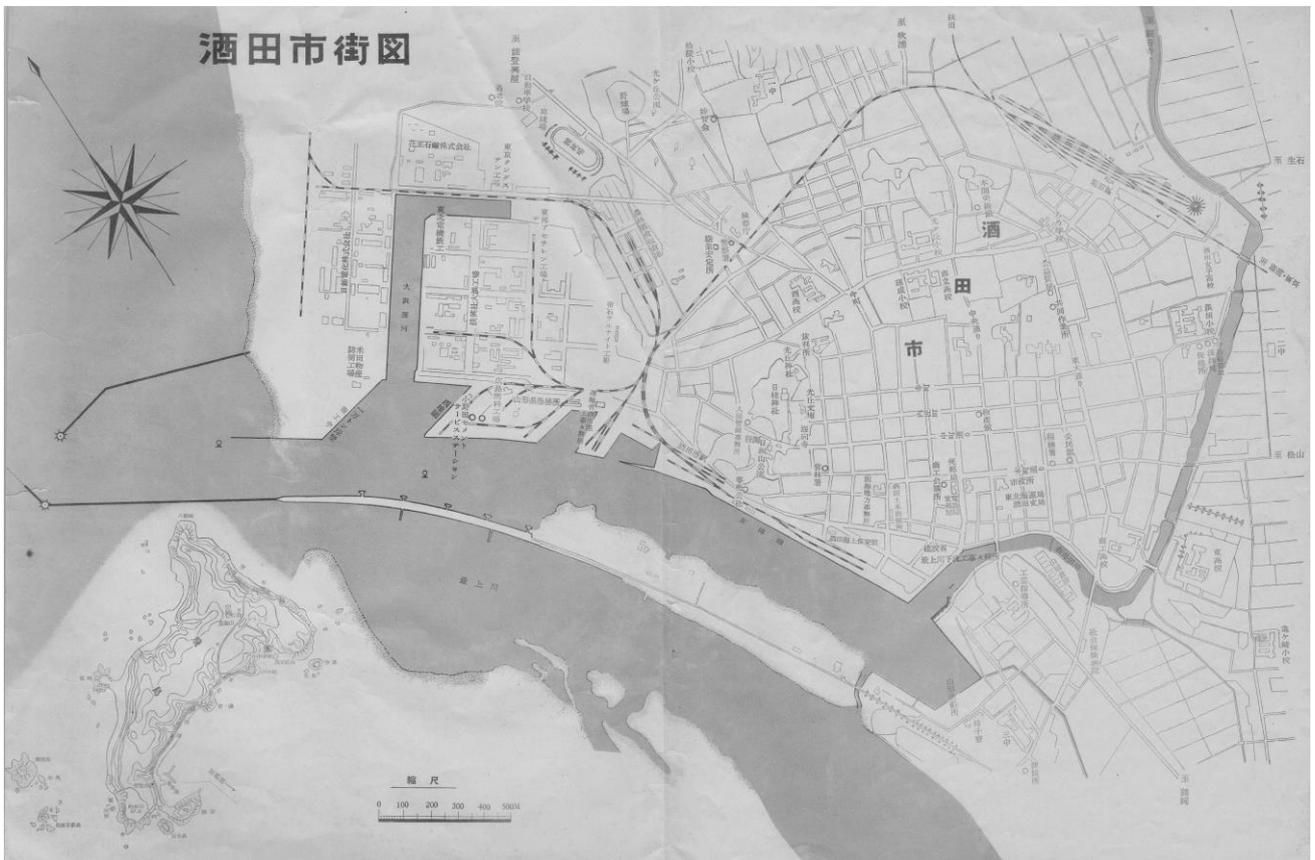
山形県では、市制・町村制が施行された明治22年(1889)に山形と米沢が市になり、ついで大正13年(1924)に鶴岡が市となっています。酒田町では大正3年(1914)から市制施行を模索していました。昭和4年(1929)に、酒田町と鶴渡川原村(現在の亀ヶ崎地区)が合併。人口2万9,979人の酒田町となり、町から市になる人口条件を満たし、その4年後の昭和8年4月1日に待望の「酒田市」が誕生しました。



酒田市案内図／昭和9年(1934)

酒田の住宅地図類としては、現在確認されているもので最も古い地図です。地図には商店や施設名が多数掲載されており、当時の商店などの場所を知ることができる貴重な資料です。

裏面は「酒田商工案内」と題して、酒田の商店などをいろは順に掲載しています。



昭和34年(1959)頃の酒田市街図

鉄興社大浜工場(現東ソー)、花王石鹼(現花王)などの工場がある大浜工場地帯は、戦時下の軍需品生産基地として造成されましたが、戦後も発展し続けています。



酒田の市街地を写した航空写真／昭和三十年（一九五五）頃